

障害者と介助者の関係について — 善意の介助事故から —

土 田 耕 司^{*1}

要 約

障害者と介助者の関係は、お互いに主体性を持った対等な信頼関係の上に成り立つことが理想と考えられる。

そこで、障害者と介助者の関係をまちの中での介助中に起こった事故についてアンケート調査を中心に検討した。介助事故が起これば障害者は「お世話になった善意の介助者に補償を求めたりはできない。」介助者は「自分の意志で善意の介助をしている障害者に補償を求めたはりしない。」という暗黙の了解が社会の常識としてあり、損害賠償を請求するなどの法的措置などを求めないで問題の解決がなされている。この暗黙の了解とは、介助における当事者間の関係から起こっている。

まちの中での介助を障害者は「出来るならば介助を受けたくないが仕方がない。」介助者は「頼まれれば介助する。」という、障害者も介助者も消極的な姿勢をみることが出来る。そこには、まちの中での介助から、いわゆる社会における障害者と健常者との関係が推測できる。

介助の関係は、基本的には人間と人間の関係であり、その人間を支えているのは私たちが創っている社会である。そこには、障害者問題に対する姿勢が社会全般に問われている。

はじめに

障害者が一人で旅行や買い物など外出した場合、まちの中で見知らぬ人から介助を受けることが考えられる。介助を受ける障害者と介助をする介助者には、如何なる関係で介助がなされているのか。

一つには、障害者と介助者の介助の関係を「ささえあい」という概念から考えることができる。「ささえあい」とは、人間の生活に必要なことであり、社会を構成する基本的な考え方の一つといえる¹⁾。この「ささえあい」を、福祉社会の方向として求められている共生社会を支える考え方の一つと筆者は考えている。

ここで、「ささえあい」の根底にある原則的な考え方にふれておく。「ささえあい」には第一に、事実直面してそれに対応するのはその人達自身である。第二に、お互いが相手を信じるのが大切である。第三に、お互いが相手にかかわっていきうとすることが大切である。この三つの大きな考え方から「ささえあい」が成り立っている²⁾。

次に、「ささえあい」の考え方に当てはめて、障害者と介助者の関係を考える。まず、障害者も介助者

も多方面から自分自身の能力を知っておくことである。そして、社会で障害者と健常者が相互に関わり合うことから、お互いの信頼関係を持つことが大切である。

介助での障害者と介助者の関係は、「ささえあい」の概念を基盤とした対等な信頼関係の上に成り立つことが理想といえる。そこでは、障害者と介助者がお互いに主体性を持った関係でなければならない。

そこで、まちの中での介助中に起こった事故について、介助での障害者と介助者の関係を考察する。

介 助 事 故

まちの中で見知らぬ人から介助を受ける時、何らかの事故に遭い損害を被ることが考えられる。つまり、まちの中での善意の介助による過失の介助事故である。また、介助時の事故は、必ずしも介助を受けている障害者が被害者になるとは限らない。介助している介助者も何らかの損害を被ることもある。

このような介助事故を法的に検討し法に従い処理を求めるなら、過失により他人の権利を侵害した場合に他ならなく、民法七〇九条による損害賠償の責任があると判断するのが妥当である³⁾。

^{*1} 兵庫県社会福祉事業団

(連絡先) 土田耕司 〒650-0011 神戸市中央区下山手通5-7-18 兵庫県社会福祉事業団

介助者側に何らかの過失があり障害者に損害を与えたら、介助者が加害者となり障害者が被害者となる。また、介助を受けている障害者側に何らかの過失があり介助者に損害を与えたら、障害者が加害者となり介助者が被害者となる。どちらにしろ、介助中に何らかの過失が発生し、相手に損害を与えたら、過失により他人の権利を侵害した場合に他ならなく、民法七〇九条により損害賠償の責任が発生する。

しかし、まちの中で見知らぬ障害者の介助時に起こった事故の多くは法のもとで処理されていない。そこには、法的に判断することができない独特の領域が残されており、当事者の判断に委ねられるところである⁴⁾。その判断に至る過程には計りし得ない当事者の複雑な心の葛藤があるに違いない。

そこで、まちの中で善意の介助時に発生した事故についてのアンケート調査から、介助における障害者と介助者の関係を考察することとした。

アンケート調査からみた介助の関係

(1) 調査の目的

まちの中で障害者が見知らぬ人から介助を受けること、介助者が見知らぬ障害者を介助することについて障害者と介助者がそれぞれの立場でどのような考え方をしているか。また、介助中に発生した介助事故の発生状況と、介助事故に対して如何なる判断の過程から解決がなされているかを調査する。

(2) 調査の対象者と方法

対象者は、1999年5月から10月の期間、岡山県と兵庫県在住の障害者と、介助者と考えられる成人の健常者にそれぞれアンケート調査を実施した。

障害者側としては、車椅子使用の障害者で病院や福祉施設に入院や入所をしていない自立生活をしている75名から聞き取りによる調査で回答を得た。

もう一方の介助者側としては、成人の健常者を対象として自己記入式のアンケート調査を行い191名の回答を得た。

(3) まちの中での介助

まちの中で知らない障害者が知らない人から介助を受けることは、アンケート結果の「A群.まちの中での介助に関する意識」から、85%とかなりの障害者に介助を受けた経験があった。また、まちの中で知らない障害者を介助した経験は健常者の36%の3分の1以上であった。さらに、まちの中で介助を依頼されれば、健常者の85%が「進んで応じる」と回答しており、「断る」との回答は無かった。

次に、一人で外出した時に知らない人からの介助が必要だと、障害者の65%が考えている。しかし、知らない人からの介助を「受けない」との自発的な

回答は13%と少なく、「受けたくない」もしくは「しかなかった」が71%と大半を占めている。このことから、介助が必要であることは認めているが、出来るならば介助は受けたくないというのが多くの障害者の本心であろう。

まちの中での介助に対しては、介助者は「頼まれれば介助するのが当然である。」障害者は「出来る限り介助を受けない。」という事実が推測できる。

(4) まちの中での介助事故の実態

まちの中での介助事故の実態としてはアンケート結果の「C群.介助事故の実態」から、調査者75名中85%の64名がまちの中で見知らぬ人から介助を受けた経験があると答えた。この64名中70%の45名が、まちの中で見知らぬ人から介助を受けている時「怖い」とか「危ない」と感じたことがあると答えている。さらに、64名中12.5%の8名がまちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受けたという回答があった。まちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受けたことがあると答えた障害者は、全調査者の約11%と高い数値であった。

また、障害者が介助を受けている時に介助者にけがなどの損害を与えたとの回答も1名あった。

障害者がまちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの介助事故は少なからず発生しており、介助事故は障害者にとって身近な生活問題であると考えてよい⁴⁾。

(5) 介助事故に対する障害者と介助者の意識の比較

アンケート結果「D群.介助事故に遭遇した場合の対応に関する意識」で、介助事故での障害者と介助者の意識を比較すると、問D-1でまちの中で介助中に相手に損害を与えたら補償をするかとの問いに対しては、障害者62%、介助者59%と、どちらも半数以上の高い数値で「補償する」と答えた。それに対して、「わからない」との数値が障害者37%と介助者39%で比較的に高かったのは、相手に何らかの過失を与えれば法的に補償をすることは社会通念上の常識であると認識してはいるが、法的な判断には委ねることのできない当事者間の複雑な気持ちの現れであろう。

次に、問D-2では損害を受けた場合に相手に補償を求めるかとの問いに対して「求める」と答えた者は障害者7%と介助者8%で、「求めない」が障害者37%と介助者28%であり、「求めない」と回答する者が「求める」に比べて多かった。しかし、「わからない」が障害者56%と介助者64%の高い数値であった。

この点については、さらに問 D-2 と問 D-3 を比較してみると、問 D-2 で相手に補償を「求めない」と回答した者と、問 D-3 で相手から補償をするとの申し出があれば補償を「受ける」と回答した者を比較すると、障害者 7%→28%, 介助者 8%→33%と、どちらも約 4 倍に数値が上がっている。これは、障害者も介助者も損害を被った場合に積極的に補償を求めたりはしないが、相手の対応の如何によっては補償を受けてもよいとの複雑な気持ちの現れだと考

えられる。

介助事故に対する意識としてアンケートの結果の比較から、障害者と介助者のどちらが加害者になったとしても、被害者になったとしても、数値的には大きな開きはみられず類似した傾向が示されている。

介護事故の対応として、大半は法的な損害賠償などの保障を求めたりはしないといえる。しかし、そこには微妙に揺れる当事者間の心の変化が見え隠れしている。

表1 アンケート結果

A群 まちの中での介助に関する意識		回答項目	人数	%
障害者回答	問A-1. まちの中で知らない人から介助を受けた経験があるか。	1. ある	64人	85%
		2. ない	11人	15%
	問A-2. あなたが、一人で外出した時に、まちの中で知らない人の介助が必要だと思いますか。	1. 思う	49人	65%
		2. 思わない	15人	20%
		3. わからない	11人	15%
介助者回答	問A-3. あなたが、まちの中で知らない人から介助を受けることをどう思いますか。	1. 受けたい	10人	13%
		2. しかたがない	36人	48%
		3. 受けたくない	17人	23%
		4. わからない	12人	16%
	問A-4. まちの中で知らない人の介助をした経験がありますか。(仕事やボランティア活動を除く)	1. ある	69人	36%
障害者回答		2. ない	122人	64%
	問A-5. まちの中で知らない人から介助を頼まれたらどうしますか。	1. 進んで応じる	162人	85%
		2. 相手によって判断する	25人	13%
		3. 断る	0人	0%
		4. わからない	4人	2%
B群 障害者の介助を受ける技術力		回答項目	人数	%
障害者回答	問B-1. 自分の介助の仕方を知らない人に的確に指示する自信がありますか。	1. 自信がある	42人	56%
		2. 自信がない	10人	13%
		3. どちらとも言えない	23人	31%
介助者回答	問B-2. 自分が介助を受けている時、介助者に任せきりになると思えますか。	1. 思う	9人	12%
		2. 思わない	45人	60%
		3. どちらでもない	21人	28%
C群 介助事故の実体		回答項目	人数	%
障害者回答	問C-1. 「問A-1で、1. ある」と答えた方に質問します。まちの中で知らない人から介助を受けている時、「怖い」とか「危ない」と感じたことがあるか。	1. ある	45人	70%
		2. ない	19人	30%
介助者回答	問C-2. 「問A-1で、1. ある」と答えた方に質問します。まちの中で知らない人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受けたことがあるか。	1. ある	8人	12.5%
		2. ない	56人	87.5%
障害者回答	問C-3. 「問C-2で、1. ある」と答えた方に質問します。その時、何らかの補償を受けましたか。	1. はい	1人	12.5%
		2. いいえ	7人	87.5%
介助者回答	問C-4. 「問C-2で、1. ある」と答えた方に質問します。まちの中で知らない人から介助を受けている時、介助者にけがや持ち物が壊れるなどの損害を与えたことがあるか。	1. ある	1人	2%
		2. ない	63人	98%
D群 介助事故に遭遇した場合の対応に関する意識		回答項目	障害者	介助者
障害者回答	問D-1. まちの中で知らない人を介助している時、もしくは、介助を受けている時、相手に損害を与えたら、補償をしますか。	1. する	62%	59%
		2. しない	1%	2%
		3. わからない	37%	39%
介助者回答	問D-2. まちの中で知らない人を介助している時、もしくは、介助を受けている時、相手から損害を受けたら、相手に補償を求めますか。	1. 求める	7%	8%
		2. 求めない	37%	28%
		3. わからない	56%	64%
障害者回答	問D-3. まちの中で知らない人を介助している時、もしくは、介助を受けている時、相手から損害を受け、相手が補償を申し出たら、補償を受けますか。	1. 受ける	28%	33%
		2. 受けない	28%	13%
		3. わからない	44%	54%
介助者回答	問D-4. まちの中で知らない人を介助している時、もしくは、介助を受けている時、相手に損害を与えた場合に、相手から補償を求められたら補償をしますか。	1. する	47%	64%
		2. しない	4%	1%
		3. わからない	49%	35%
障害者回答	問D-5. まちの中での介助事故についての問題を議論する機会を持つことについてどう思いますか。	1. 議論するべきだ	78%	70%
		2. 議論したくない	5%	6%
		3. 機会があればしたい	17%	24%

(6) 要約

本アンケート調査は、調査地域や調査者の年齢層など詳細さに欠けていたことや車椅子使用の障害者に限定した点など、現時点での信頼性を深く論ずることは難しい。これらについては、今後の検討を待ちたい。

しかし、まちの中での介助事故の問題は、障害者の生活問題であり、当事者の複雑な心の動きが見え隠れしながらも、法的には解決されない当事者の道徳観に左右されるところが大きい。

いったん介助事故が起これば障害者は「お世話になった善意の介助者に補償を求めたりはできない。」介助者は「自分の意志で善意の介助をしている障害者に補償を求めたりしない。」という暗黙の了解がある⁴⁾。この暗黙の了解が社会の常識として、損害賠償を請求するなどの法的措置などを求めないで問題の解決がなされているといえる。この暗黙の了解は、介助における当事者の関係から起こっている。

そこで、まちの中での介助を障害者は「出来るならば介助を受けたくないが仕方がない。」介助者は「頼まれれば介助する。」という、障害者も介助者も消極的な姿勢をみることが出来る。そこには、まちの中での介助から、いわゆる社会での障害者と健常者の関係を表していると推測できる。

おわりに

介助の関係を、「ささえあい」という概念から考えることによって、障害者と介助者がお互いに主体性

を持った信頼関係で成り立つことが介助関係の理想と考えられる。

しかし、アンケート調査から得られたまちの中で障害者が見知らぬ人から介助を受けること、健常者が見知らぬ障害者を介助すること、さらに、そこで起こった介助事故から障害者と介助者の関係を考えてきた。そこには、「出来るならば介助を受けたくないが仕方がない。」という障害者と、「頼まれれば介助する。」という介助者の介助に対する消極的な考えがあり、障害者と介助者の間に介助に対して両者に主体的な積極さをみることはできない。

介助は介助する側、される側の当事者だけの問題ではない。側面的には、社会に求められるニーズは大きい。そこには、最近注目されているハートビル法や地方自治体の福祉のまちづくり条例制定にみられるような、まちづくりの推進が社会に求められている⁵⁾。また、障害者と介助者の負担を軽減するための介護器具の開発や社会環境の整備、およびこれらの財源の確保が課題である⁶⁾。障害者の介助やその介助作業までもを課題としたインフラの整備が社会に対して求められ、側面からの障害者のみならず介助者までもの支援が欠かせない。

最後に、介助を受ける障害者も人間、介助する健常者も人間である。介助の関係は、根底は人間と人間の関係である。その一人ひとりの人間を支えているのは私たちが創っている社会である。そこには、社会全般に障害者問題に対する姿勢が問われている。

文 献

- 1) 森岡正博編(1994)「ささえあい」の人間学。法蔵館, pp19-20.
- 2) 前掲書1) pp47-63.
- 3) 高梨公行, 倉澤康一郎編(1989) 図解による法律用語辞典。自由国民社, pp287-288.
- 4) 土田耕司(2000) 身体障害者の介助事故に関する研究。川崎医療福祉学会誌, **10**(1), 171-174.
- 5) 齊場三十四(1999) バリアフリーの社会構造。明石書店, pp97-100.
- 6) 鳥羽寿範・桂 律也(1994) 外出のための医学的リハビリテーション。総合リハビリテーション, **22**(7), 561.

(平成12年12月12日受理)

The Relations Between Physically Challenged People and Their Assistants — From the Good-Intentioned Care Accidents —

Koji TODA

(Accepted Dec. 12, 2000)

Key words : GOOD-INTENTIONED CARE, THE ACCIDENTS IN ASSISTANCE, MUTUAL SUPPORT

Abstract

I made an inquiry into the relations between physically challenged people and their assistants from a questionnaire about accidents which occur during good-intentioned care. I realized that for the physically challenged people accidents which occur during good-intentioned care are a part of their daily life in the village of disabled people.

When such accidents occur the physically challenged people usually do not search for legal settlement of the problem. At the root of this are the relations between the assistants and the physically challenged people, the latter being passive in the caregiving process. From the point of view of the ideal relationship, one of “mutual support”, the relations between the caregivers and the physically challenged people are largely based on mutual trust. It is very important to further on consider different problems concerning caregiving.

Correspondence to : Koji TODA

Hyogo Prefectural Social Welfare Corporation

Kobe, 650-0011, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.10, No.2, 2000 231-235)